

# 虱

芥川龍之介

青空文庫



## 一

げんぢ

元治元年十一月二十六日、京都守護の任に當つてゐた、加州家

の同勢は、折からの長州征伐に加はる為、くにがらう 国家老の長 おほすみのか 大隅

守<sup>み</sup>を大将にして、大阪の安治川口から、あちかはぐち 船を出した。

こがしら

小頭は、つくだきうだいふ 佃久太夫、山岸三十郎の二人で、佃組の船には

しろのぼり

白 幟、山岸組の船には赤幟が立つてゐる。五百石積の金毘羅 こんぴら

船が、皆それぞれ、紅白の幟を風にひるがへして、川口を海へのり出した時の景色は、いか 如何にも勇ましいものだつたさうである。

しかし、その船へ乗組んでゐる連中は、中々勇ましがつてゐる

所の騒ぎではない。第一どの船にも、一艘に、主従三十四人、船頭四人、併あはせて三十八人づつ乗組んでゐる。だから、船の中は、皆、身動きも碌ろくに出来ない程狭い。それから又、胴の間まには、沢たくあんづけ どぢやうをけ 庵漬を 鰯 桶 へつめたのが、足のふみ所もない位、ならべてある。慣れない内は、その臭氣を嗅ぐと、誰でもすぐに、吐き氣を催した。最後に旧曆の十一月下旬だから、海上を吹いて来る風が、まるで身を切るやうに冷い。殊に日が暮れてからは、摩耶まや風しなり水の上なり、流石さすがに北国生れの若侍も、多くは齒の根が合はないと云ふ始末であつた。

その上、船の中には、虱しらみが沢山ゐた。それも、着物の縫目にかくれてゐるなどと云ふ、生やさしい虱ではない。帆にもたかつて

ゐる。幟にもたかつてゐる。ほばしら 檣にもたかつてゐる。いかり 錨にもたかつてゐる。少し誇張して云へば、人間を乗せる為の船だか、風を乗せる為の船だか、判然しない位である。勿論その位だから、着物には、何十匹となくなかつてゐる。さうして、それが人肌にさへさはれば、すぐに、いい氣になつて、ちくちくやる。それも、五匹や十匹なら、どうにでも、せいとうのしやうがあるが、前にも云つた通り、白胡麻しろごまをふり撒いたやうに、沢山ゐるのだから、とても、とりつくすなどと云ふ事が出来る筈のものではない。だから、佃組と山岸組とを問はず、船中にある侍と云ふ侍の体は、ことごと悉く虱に食はれた痕で、あとまるで麻疹はしかにでも罹つたやうに、胸と云はず腹と云はず、一面に赤く腫れ上がつてゐた。

しかし、いくら手のつけやうがないと云つても、そのまま打<sup>うつち</sup>

遣<sup>や</sup>つて置くわけには、猶<sup>なほ</sup>行かない。そこで、船中の連中は、暇

さへあれば、虱狩をやつた。上は家老から下は草履<sup>ざうりとり</sup>取まで、悉

く裸になつて、随所にある虱をてんでに茶吞茶碗の中へ、取つて

は入れ、取つては入れするのである。大きな帆に内海の冬の日を

うけた金毘羅船の中で、三十何人かの侍が、湯もじ一つに茶吞茶

碗を持つて、帆綱の下、錨の陰と、一生懸命に虱ばかり、さがし

て歩いた時の事を想像すると、今日では誰しも滑稽だと云ふ感じ

が先に立つが、「必要」の前に、一切の事が真面目になるのは、

維新以前と雖<sup>いへど</sup>も、今と別に変りはない。——そこで、一船の裸侍

は、それ自身が大きな虱のやうに、寒いのを我慢して、毎日根気

よく、そこここと歩きながら、丹念に板の間の虱ばかりつぶしてゐた。

## 二

所が佃組の船に、妙な男が一人ゐた。これは森権之進ごんのしんと云ふ  
中老のつむじ曲りで、身分は七十俵五人扶持ぶちの御徒士おかちである。こ  
の男だけは不思議に、虱をとらない。とらないから、勿論、何処どこ  
と云はず、たかつてゐる。鬚まげぶしへのぼつてゐる奴があるかと思  
ふと、袴腰のふちを渡つてゐる奴がある。それでも別段、気にか  
ける容子ようすがない。

ではこの男だけ、虱に食はれないのかと云ふと、又さうでもない。やはり外の連中ほかのやうに、体中金銭斑々きんせんはんはんとでも形容したらよからうと思ふ程、所まだらに赤くなつてゐる。その上、当人がそれを搔いてゐる所を見ると、痒かゆくない訳でもないらしい。が、痒くつても何でも、一向平気で、すましてゐる。

すましてゐるだけなら、まだいいが、外の連中が、せつせと虱狩をしてゐるのを見ると、必かならずわきからこんな事を云ふ。――

「とるなら、殺し召さるな。殺さずに茶碗へ入れて置けば、わしが貰うて進ぜよう。」

「貰うて、どうさつしやる？」同役の一人が、呆あきれた顔をして、かう尋ねた。



「貰うてか。貰へばわしが飼うておくまでぢや。」

森は、恬然<sup>てんぜん</sup>として答へるのである。

「では殺さずにとつて進ぜよう。」

同役は、冗談<sup>じょうだん</sup>だと思つたから、二三人の仲間と一しよに半

日がかりで、虱を生きたまま、茶吞茶碗へ二三杯とりためた。この男の腹では、かうして置いて「さあ飼へ」と云つたら、いくら依怙<sup>えこぢ</sup>地な森でも、閉口するだらうと思つたからである。

すると、こつちからはまだ何とも云はない内に、森が自分の方から声をかけた。

「とれたかな。とれたらわしが貰うて進ぜよう。」

同役の連中は、皆、驚いた。

「ではここへ入れてくれさつしやい。」

森は平然として、着物の襟えりをくつろげた。

「瘦我慢をして、あとでお困りなさるな。」

同役がかう云つたが、当人は耳にもかけない。そこで一人づつ、持つてゐる茶碗さかさまを倒にして、米屋が一合ます枘で米をはかるやうに、ぞろぞろ虱をその襟元へあけてやると、森は、大事さうに外へこぼれた奴を拾ひながら、

「有難い。これで今夜から暖あたたかに眠られるて。」といふ独ひとりごと語を云ひながら、にやにや笑つてゐる。

「虱があると、暖うござるかな。」

呆あつ氣にとられてゐた同役は、皆互に顔を見合せながら、誰に尋

ねるともなく、かう云つた。すると、森は、虱を入れた後の襟を、丁寧<sup>ていねい</sup>に直しながら、一応、皆の顔を莫迦<sup>ばか</sup>にしたやうに見まはして、それからこんな事を云ひ出した。

「各々は皆、この頃の寒さで、風をひかれるがな、この権之進はどうぢや。噫<sup>くさめ</sup>もせぬ。洩<sup>はな</sup>もたらさぬ。まして、熱が出たの、手足が冷えるのと云うた覚は、嘗<sup>かつ</sup>てあるまい。各々はこれを、誰のおかげぢやと思はつしやる。——みんな、この虱のおかげぢや。」

何でも森の説によれば、体に虱があると、必<sup>かならず</sup>ちくちく刺す。刺すからどうしても搔きたくなる。そこで、体中万遍なく刺されると、やはり体中万遍なく搔きたくなる。所が人間と云ふものはよくしたもので、痒い痒いと思つて搔いてゐる中に、自然と搔いた

所が、熱を持ったやうに温くなってくる。そこで温くなつてくれ  
ば、睡くなつて来る。睡くなつて来れば、痒いのもわからない。  
——かう云ふ調子で、虱さへ体に沢山ゐれば、睡<sup>ね</sup>つきもいいし、  
風もひかない。だからどうしても、虱飼ふべし、狩るべからずと  
云ふのである。……

「成程、そんなものでござるかな。」同役の二三人は、森の虱論  
を聞いて、感心したやうに、かう云つた。

## 三

それから、その船の中では、森の真似をして、虱を飼ふ連中が

出来て来た。この連中も、暇さへあれば、茶吞茶碗を持つて虱を追ひかけてゐる事は、外の仲間と別に変りがない。唯、ちがふのは、その取つた虱を、一々刻銘こくめいに懷ふところに入れて、大事に飼つて置く事だけである。

しかし、何処いづくの国、何時の世でも、[Precurseur] の説が、そのまま何人にも容れられると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論にの説が、そのまま何人なんびとにも容れられると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論に反対する、Pharisien が大勢ゐた。

中でも筆頭第一の Pharisien は井上典蔵と云ふ御徒士おかちである。

これも亦また妙な男で、虱をとると必ず皆食つてしまふ。夕がた飯をすませると、茶吞茶碗を前に置いて、うまさうに何かぷつりぷつ

り噛んでんでゐるから、側へよつて茶碗の中を覗いて見ると、それが皆、とりためた虱である。「どんな味でござる？」と訊くと、「左様さ。油臭い、焼米のやうな味でござらう」と云ふ。虱を口でつぶす者は、何処にでもゐるが、この男はさうではない。全く点<sup>てんしん</sup>心を食ふ気で、毎日虱を食つてゐる。——これが先<sup>まづ</sup>、第一に森に反対した。

井上のやうに、虱を食ふ人間は、外に一人もゐないが、井上の反対説に加担をする者は可<sup>かなり</sup>成<sup>なり</sup>ゐる。この連中の云ひ分によると、虱がゐたからと云つて、人間の体は決して温まるものではない。そののみならず、孝経にも、身<sup>しん</sup>体<sup>たい</sup>髪<sup>はつ</sup>膚<sup>ぷ</sup>之<sup>これ</sup>を父母に受く、敢<sup>あへ</sup>て毀<sup>き</sup>傷<sup>しやう</sup>せざるは孝の始なりとある。自<sup>みづ</sup>、好<sup>から</sup>んでその身体を、虱如き

に食はせるのは、不孝も亦甚しい。だから、どうしても虱狩るべし。飼ふべからずと云ふのである。……

かう云ふ行きがかりで、森の仲間と井上の仲間との間には、時折口論が持上がる。それも、唯、口論位ですんでゐた内は、差支へない。が、とうとう、しまひには、それが素で、思ひもよらない刃傷沙汰さへ、始まるやうな事になつた。

それと云ふのは、或日、森が、又大事に飼はうと思つて、人から貰つた虱を茶碗へ入れてとつて置くと、油断を見すまして井上が、何時の間にかそれを食つてしまった。森が来て見ると、もう一匹もない。そこで、この [Precurseur] の説が、そのまま何人にも容れられると云ふ事は滅多にない。船中にも、森の虱論にが

腹を立てた。

「何故、人の虱を食はしつた。」

張<sup>はり</sup>肘<sup>ひぢ</sup>をしなから、眼の色を変へて、かうつめよると、井上は、

「自体、虱を飼ふと云ふのが、たはけぢやての。」と、空<sup>そらうそぶ</sup>嘯<sup>さう</sup>いて、まるで取合ふけしきがない。

「食ふ方がたはけぢや。」

森は、躍起となつて、板の間をたたきながら、

「これ、この船中に、一人として虱の恩を蒙らぬ者が<sup>どうぜん</sup>ござるか。その虱を取つて食ふなどは、恩を仇でかへすのも同前ぢや。」

「身共は、虱の恩を着た覚えなどは、毛頭<sup>みだり</sup>ござらぬ。」

「いや、たとひ恩を着ぬにもせよ、妄<sup>みだり</sup>に生<sup>しやうるゐ</sup>類の命を断つなど



とは、言語道断ごんごだうだんでござらう。」

二言三言云ひつゝのつたと思ふと、森がいきなり眼の色を変へて、  
 蝦えび鞘さや卷まきの柄つかに手をかけた。勿論、井上も負けてはゐない。すぐ  
 に、朱しゆ鞘ざやの長物ながものをひきよせて、立上る。——裸で虱をとつて  
 ゐた連中が、慌てて兩人を取押へなかつたなら、或はどちらか一  
 方の命にも関る所であつた。

この騒ぎを実見した人の話によると、二人は、一同に抱きすく  
 められながら、それでもまだ口角に泡を飛ばせて、「虱。虱。」  
 と叫んでゐたさうである。

#### 四

かう云ふ具合に、船中の侍たちが、虱の為に刃傷沙汰を引起してゐる間でも、五百石積の金毘羅船だけは、まるでそんな事には頓着しないやうに、紅白の幟を寒風にひるがへしながら、遙々として長州征伐の途に上るべく、雪もよひの空の下を、西へ西へと走つて行つた。

（大正五年三月）

# 青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 43 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

入力：j.utiyaana

校正：野口英司

1998年3月16日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 虱

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>